師範國文

本科用

文部省

文部省圖書寮
K450.8
2
(第一級)

K450.8

2

紫式部日記抄

二、枕草子

紫式部……一
清少納言……一〇

昭和廿一年九月十日印刷
昭和廿一年九月廿三日發行
昭和廿一年九月廿五日翻刻印刷
昭和廿一年十月廿日翻刻發行
〔昭和廿一年九月廿五日文部省檢定濟〕
師範國文 木科用
定價 金五十錢
Approved by Ministry of Education (Date Sept. 25, 1946)
著作權所有 著作兼發行者 文部省
翻刻發行者 東京都神田區錦町一丁目十六番地 師範學校教科書株式會社 代表者 森下松商
印刷者 東京都京橋區入舟町一丁目十一番地 電堂 代表者 新井修平
發行所 東京都神田區錦町一丁目十六番地 師範學校教科書株式會社

紫式部日記抄

一 紫式部

秋のけはひの立つまゝに、土御門殿のありさま、いはむ方なくをかし。池のわたりの稍ども、遣水の邊の草むら、おのがじし色づき渡りつゝ、大方の空もえんなるにもてはやされて、不斷の御讀經の聲々、哀れまさりけり。やうやう涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ水の音なひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前にも、近うさぶらふ人々はかなき物語するをきこしめしつゝ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせ給へり。御ありさまなどのいとさらなることなれど、うき世のなぐさめには、かゝるおまへをこそ、たづねまるるべかりけれとうつし心をば引きたがへ、たとしへなくよろづ忘るゝにもかつはあやしき。

八月廿日あまりのほどよりは、わざとの御遊びは、殿おぼすやうやあらん、せさせ給はず。

廿六日、御たき物合せはてて、人々にもくばらせ給ふ。

○八月廿日―寛弘五年

○九日―九月九日

九日、菊の綿を、兵衛のおもとのもてきて、これ、とのゝうへの、とりわきていとよう、おいのごひすて給へとの給はせつる。とあれば、

菊の露わくる許りに袖ぬれて花のあるじにちよは譲らん

とて、返し奉らんとするほどに、あなたにかへりわたらせ給ひぬとあれば、ようなさに、とゞめつ。そのよさり、御まへにまゐりたれば、月をかしきほどにて、はしにみすのしたより、裳のすそなど、ほころび出づるほど〳〵に、こ少將の君、大納言のきみなどさぶらひ給ふ。御ひとりに、ひとひのたきものとうでて、こゝろみさせ給ふ。御まへのありさまのをかしさ、つたのいろの心もとなきなどくち〳〵きこえさするに、れいよりも、なやましき御けしきにおはしませば、御かぢどももまゐるかたなり。さわがしきこゝちしていりぬ。人のよべば、つぼねにおりて、しばしとおもひしかどねにけり。夜中ばかりよりさわぎたちてのゝしる。

十日のまだほのぼのとする程に、御しつらひかはる。白き御帳に移らせ給ふ。

十一日の暁に、北の御さうじ二まはなちて、庇に移らせ給ふ。人げ多くこみてはいとゞ御心ちもくるしうおはしますらんとて、南おもて東おもてにいださせ給うて、さるべきかぎりこの二まのもとにはさぶらふ。いま一さにゐたる人々いと年へたる人々のかぎりにて、心をまどはしたるけしきどものいとことわりなるに、まだ見奉りなるゝほどなけれど、たぐひなくいみじと、心ひとつにおぼゆ。

○午のとき―九月十二日

午のときに空はれて、あさ日さし出でたる心地す。たひらかにおはします。うれしさのたぐひもなきに、をとこにさへおはしましけるよろこびいかゞはなのめならん。御まへには、うちねぴたる人々のかゝるをりふしつき〳〵しきさぶらふ。うちには、御ゆ殿のぎしきなど、かねてまうけさせ給へふべし。

御ゆどのはとりの時とか。火ともして、宮のしもべ、みどりのきぬのうへに、しろきたうじきて、御ゆまゐる。其の桶すゑたるだいなど、みなしろきおほひしたり。

宮は、殿いだき奉り給ひて、御はかし、小少將の君、虎のかしら、宮の内侍とりて御さきにまゐる。殿の公達二所、源少將雅通などうちまきをなげのゝし

り、われたかううちならさんとあらそひさわぐ。へんち寺の僧都ごしんにさぶらひ給ふ。かしらにもめにも、あたるべければ扇をさゝげて、わかき人人にわらはる。文よむはかせ、藏人辨ひろなり、勾欄のもとにたちて、更記の一くわんをよむ。弦うち廿人、五位十人、六位十人、ふたなみにたちわたれり。よさりの御湯殿とても、きまばかりしきりてまゐる。儀式同じ。御ふみの博士ばかりや、奏りけん。伊勢守むねときの博士とか。例の孝經なるべし。又たかちかは、更記の文章の卷をよむなるべし。

三日にならせ給ふよは、宮づかさ、太夫よりはじめて、御うぶやしなひつかうまつる。

五日夜は、殿の御うぶやしなひ。十五日の月、くもりなくおもしろきに、池のみぎは近う、かゞり火どもを木のしたにともしつゝ、とじきどもたてわたす。あやしきしづのをのきへづりありく氣しきどもまで、色ふしにたちがほなり。とのもりが、たゞわたれるけはひもおこたらず。ひるのやうなるに、こゝかしこのいはがくれ、木のもとごとに、うちむれてゐる上達部のすゐじんなどやうのものどもさへ、おのがじしかたらふべかめることは、かゝる世の中の光のいでおはしましたる事をかげにいつしかと思ひしも、およびがほにこそ。そゞろにうちゑみ、こゝちよげなるや。ましてとゝのうちの人はなにばかりのかすにしもあらぬ五位どもなども、そこはかとなく腰うちかがめて行きちがひ、忙しげなるさまして、時にあひ顔なり。

上達部、座をたちて、御はしのうへにまゐり給ふ。殿をはじめ奉りて、攤うち給ふ。紙のあらそひ、いとまさなし。歌どもあり。女房さかづきなどあるをり、いかゞはいふべきなど、くち〳〵思ひこゝろみる。

珍らしき光さしそふ杯は持ちながらこそちよもめぐらめ

四條大納言にさしいでんほど、歌をばさるものにて、こわづかひよういひのべじなど、さゞめきあらそふほどに、ことおほくて、夜いたうふけぬればにや。とりわきてもさゝでまかで給ふ。

またの夜、月いとおもしろくころさへをかしきに、わかき人は、舟にのりて遊ぶ。いろ〳〵なるをりよりも、同じきまにきうぞきたるやうだい、かみのほどくもりなくみゆ。

七日のよは、おほやけの御うぶやしなひ。藏人少將道雄を御つかひにて、

物のかず〳〵かきたるふみ、やないばこに入れてまゐれり。やがて返し給ふ。勸學院衆どもあゆみしてまゐれるげざんのふみども又けいす。かへし給ふ。ろくども給ふべし。こよひのぎしきは、ことにまさりて、おどろおどろしくのゝしる。

八日。人々色々さうぞきかへたり。

九日、夜は、春宮權太夫つかうまつり給ふ。しろきみづしひとよろひに、まゐりすゑたり。

十月十余日までも、御帳出でさせ給はず。西のそばなるおましにより、ひるもさぶらふ。との、の夜中にもあかつきにもまゐり給ひつゝ、わが心をやりてさゝげうつくしみ給ふもことわりにめでたし。

行幸ちかくなりぬとて、とのゝうちをいよ〳〵つくりみがゝせ給ふ。世にもおもしろき菊のねをたづねつゝほりてまゐる。いろ〳〵うつろひたるも、黄なるが見どころあるもさま〳〵にうゑたてたるを、あさぎりのたえまに、見わたしたるほげに老いもしぞきぬべきこゝちするにぞやまして、おもふことのすこしもなのめなる身ならましかば、すき〳〵しくももてな

しわかやぎて、常なき世をもすぐしてまし、めでたきことおもしろきことを見きくにつけても、たゞおもひかけたりし心のひぐかたのみつよくて、ものうく、おもはずになげかしき事のまさるぞいとくるしき。いかで今は猶、ものわすれしなん、思ひがひもなし。つみもふかかりなど、あけたてばうちながめて、水鳥どもの、思ふことなげにあそびあへるを見る。

水鳥を水の上とやよそにみん我も浮きたる世を過ぐしつゝ

かれも、さこそ心をやりてあそぶとみゆれど、身はいとくるしかりなんと思ひよそへらる。

その日、あたらしくつくられたる舟ども、さしよせさせて御覽ず。れう頭げきしゆの、いけるかたち、おもひやられて、あざやかにうるはし。行幸は、辰の時と、まだ曉より、人々けさうじ心づかひす。

御輿むかへ奉る。ふながくいとおもしろし。

御帳のにしおもてに、おましをしつらひて、みなみの庇の、ひんがしのまに、御いしを立てたる。それより一まへだてゝ、ひんがしにはれたるきはに、北みなみのつまに、みすをかけへだてゝ、女房のゐたる、南のはしらもとより、す

だれをすこし引きあげて、内侍二人いづ。その日のかみあげうるはしきすがたからゑをゑかしげにかきたるやうなり。左衛門のないし御はかしとる。青いろのむもんのからぎぬ、すそごのも、ひれくんたいはふせんれうを、はじだんにそめたり。うはぎはきくの五へかいねりはくれなゐすがたつきもてなし、いさゝかはづれて見ゆるかたはらめ、はなやかにきよげなり。

殿の内侍はしるしの御はこ。くれなゐに、えびぞめのおりもののうちぎ、裳からぎぬはきぎのにおなじこと。いとさゝやかにをかしげなる人の、つゝましげに、すこしつゝみたるぞ、心ぐるしう見えける。あふぎよりはじめて、好みましたりとみゆ。ひれは、あふちだん。ゆめのやうにも今宵のたつほどよそほひ、むかしあまくだりけんをとめごのすがたも、かくやありけむとまでおぼゆ。近衛司いとつきづきしき姿して、御輿のことども行ふ。いときらきらし。頭中將、御はかしなどとりて、内侍につたふ。

殿わか宮いだきたてまつり給ひて、おまへにいで奉り給ふ。うへいだきうつし奉らせ給ふ程、いさゝかなかせ給ふ御ごゑいとわかし。もやの中の戸よりにしに、とののうへおばする方にぞわか宮はおはしまさせ給ふ。うへとにいでさせ給ひてぞ、宰相の君はこなたにかへりて、いとけそうにはしたなき心地しつる。とげにおもてうちあかみてゐ給へるかほ、こまかにをかしげなり。衣の色も人よりけにきはやし給へり。

くれゆくまゝにがくどもいとおもしろし。上達部おまへにさぶらひ給ふ。萬ざいらく、太平樂、賀でんなどいふまひども、ちやうげいしをまかで音聲にあそびて、山のさきのみちをまふほど、とほくなりゆくまゝに、ふえの音もつゞみのおとも松風もこぶかく吹きあはせていとおもしろし。

御前のあそびはじまりていとおもしろきに、若宮のみ聲うつくしうきこえ給ふ。右のおとゞ、萬歳樂みこゑにあひてなむさこゆる。ともてはやしきこえ給ふ。

○國枝正直著、紫式部日記精解に拠る。

二　枕草子

清少納言

(一)

・をかし「おかし」　うへにさぶらふ御ねこは、かうぶり給はりて、命婦のおとゞとて、いとをかしければ、かしづかせ給ふ。はしに出でたるを、めのとのむまの命婦、あなまさなや。いり給へ。とよぶに、きかで、日のさしあたりたるに、うちねぶりてゐたるを、おどずとて、おきなまろいづく。命ぶのおとゞくへ。といふに、まことかとて、しれものはしりかゝりたれば、おびえまどひて、みすのうちにいりぬ。

・おびえ「をびえ」　・あさがれひ「あさがれい」　・をのこ「おのこ」　・まゐり「まいり」

あさがれひのまに、うへはおはします。御らんじていみじうおどろかせ給ふ。ねこは御ふところにいれさせ給ひてをのこどもめせば、蔵人たゞたかまゐりたるに、此おきなまろうちてうじていぬ島につかはせ。たゞいま。とおほせらるれば、あつまりてかりさわぐ。むまの命婦もさいなみて、めのとかへてむ。いとうしろめたし。とおほせらるれば、かしこまりて御前にも出

・さわぐ「さはぐ」

・おひ「をひ」　です。いぬはかり出でて、たきぐちなどしておひつかはしつ。

あばれいみじくゆるぎありきつるものを、三月三日に、頭辨、柳のかづらをせさせ、もゝの花かざしにさせ、さくらこしにさゝせなどしてありかせ給ひしをり、かゝるめ見んとはおもひかけけむやと、あはれがる。おもののをりば、かならずむかひさぶらふに、さう〳〵しくこそあれ。などいひて、三四日になりぬ。ひるつかた、犬のいみじくなくこゑのすれば、なにぞの犬のかくひさしくなくにか、あらむときくに、よろづの犬どもはしりさわぎとぶらひにゆき、みかはやうどなるものはしりきて、あないみじ。犬を蔵人二人して、うち給ひしぬべし。ながさせ給ひけるがかへりまゐりたりとて、てうじ給ふ。といふ。心うのことや、おきなまろなり。たゞたかさねふさなむうつ。と言へば、せいしにやるほどに、からうじてなきやみぬ。しにければ門のほかにひきすてつ。といへば、あはれがりなどする。夕つかた、いみじげにはれあさましげなる犬のわびしげなるがわなゝきありけば、あはれまろか。かゝるいぬやはこのごろは見ゆる。などいふに、おきなまろ。とよべど、みゝにも聞きいれず。それぞ。といひ、あらず。といひ、くち〳〵申せば、右近ぞ見しりたる。

・をり「おり」　・をり「おり」　・さわぎ「さはぎ」　・まゐり「まいり」

べ。とて、しもなるを、まづとみのこと。とてめせばまゐりたり。「これはおきなまろか。と見せさせ給ふに、似て侍れども、これはゆゝしげにこそ侍るめれ。又『おきなまろ』とよべば、よろこびてまうでくるものを、よべどよりこず。あらぬなめり。『それはうちころしてすて侍りぬ。』とこそ申しつれ。さる物どもの二人してうたむには、生きなむや。と申せば、心うがらせ給ふ。

くらうなりて、物くはせたれどくはねば、あらぬものにいひなしてやみぬるうとめて、みけづりぐしにまゐり、御てうづまゐりて、御かゞみもたせて御らんず。れば、さぶらふに、犬のはしらのもとについゐたるを、あはれ、きのふおきなまろをいみじう打ちしかな。しにけんこそかなしけれ。何の身にか此のたびはなりぬらむ。いかにわびしきこゝちしけむ。とうちいふほどに、此ねたるいぬふるひわなゝきて、なみだをたゞおとしにおとす。いとあさまし。さほ、これおきな丸にこそはありけれ。よべはかくれしのびてあるなりけりとあはれにて、をかしきごとかぎりなし。御かゞみをもうちおきて、さはおきなまろ。といふに、ひれふしていみじくなく。御前にもうちわらはせ給ふ。人々まゐりあつまりて、右近内侍めして、かくなどおほせらるれば、わらひのゝしる。（中略）

・まゐり、「まいり」
・まゐり、「まいり」
・をかしき、「おかしき」
・まゐり、「まいり」

さてのち、かしこまりかうじゆるされて、もとのやうになりにき。なほあはれがられて、ふるひなき出でたりしほどこそ、よにしらず、をかしくあはれなりしか。人などこそ人にいはれて、なきなどはすれ。

（二）

うつくしきもの。ふりにかきたるちごのかほ。すゞめの子のねずなきするにをどりくる。またべになどつけてすゑたれば、おやすゞめの虫などもてきてくゝむるもいとらうたし。みつばかりなるちごの、いそぎてはひくる道に、いとちひさきちりなどの有りけるをめざとに見つけていとをかしげなるおよびにとらへて、おとなどに見せたる、いとうつくし。あまにそぎたるちごの目に髪のおほひたるをかきはやらでうちかたぶきて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひたるこしのかみのしろうをかしげなるも見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごの、あからさまにいだきてう

・をかしく、「おかしく」
・人などこそ人に（三卷本）、「人々にもの」
・などはすれ（三卷本、「などす」
・をどり、「おどり」
・すゑ、「すう」
・ちひさき、「ちいさき」
・および、「をよび」
・をかし、「おかし」
・をかしげ、「おかしげ」

つくしむほどに、かいつきてね入たるもらうたし。ひいなのてうど。はちすのうき葉のいとちひさきを、池よりとりあげて見る。あふひのちひさきもいとうつくし。何も〳〵ちひさき物はいとうつくし。いみじうとえたるちごの二つばかりなるが、しろううつくしきが、二あゐのうすものなどきぬながくて、たすきあげたるが、はひ出でくるもいとうつくし。やつ九つ十ばかりなるをのこの、薛をさなげにて文よみたるいとうつくし。にはとりのひなのあしだかに、しろうをかしげに、きぬみじかなるさまして、ひよ〳〵とかしがましくなきて、人のしりにたちてありくも、又おやのもとにつれだちありく見るもうつくし。かりのこ。さりのつぼ。なでしこのはな。

・かいつき、「かひつき」
・ちひさき、「ちいさき」
・しろう、「しろふ」
・をのこ、「おのこ」
・をさなげ、「おさなげ」
・しろう、「しろふ」
・をかしげ、「おかしげ」